

マッカーサーはなぜ解任されたのか

久保田誠一

トルーマン大統領は1951年（昭和26年）4月11日午前1時にホワイトハウスに記者団を集めショート報道官を通じて、マッカーサー国連軍最高司令官を解任し、後任にリッジウェー中將を任命したことを明らかにした。配布された大統領声明には「非常に遺憾なことであるが、私はマッカーサー元帥が公的任務の遂行にあたり、米国および国連の方針を全面的に支持していないと結論するに至った」と記されていた。

午前1時という異例の時間に記者会見が行われたのは、シカゴ・トリビューン紙がマッカーサー解任の決定を察知し、11日の紙面に書くことが明らかになったからだった。

事前通告なしの罷免

米東部時間の11日午前1時は日本時間の同日午後3時である。大使館で遅い昼食をとっていたマッカーサーの元にシドニー・ハフ大佐が茶色の封書を持参した。中には元帥解任を伝える米軍放送の内容が書かれていた。

「私は自分が解任されたことを、ラジオの報道で初めて知らされた。司令官の更迭は時には気紛れで、時には正当な理由で行われている。今回の場合は聴聞もなく、弁明の余地も与えられず、過去の経歴に対する考慮もなかった」

マッカーサーは回想記にその時の怒りを吐露している。

彼は4月19日、上下両院合同会議（ワシントン）で「戦争を余儀なくされた場合、唯一の道はあらゆる手段を講じて戦いを終結させることである。戦争には勝利に代わるものはない。われわれの中には中共に迎合しようとするものがある。彼らは歴史の教訓に目をそむけている」と、米政権の極東戦略を厳しく批判し、「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」と、歴史に残る名言を吐いて、52年にわたる軍籍に別れを告げた。（トルーマンは「極東訪問中のペース陸軍長官に9日、東京で解任命令を渡す手筈を整えていたが、手違いが重なって辞令伝達が遅れた」と釈明している）

朝鮮戦争とマッカーサー

マッカーサーの軍人としての最後の舞台になった朝鮮戦争は50年6月25日に始まり、53年7月27日に休戦となった。

第2次大戦後、米中が地上戦、米ソが空中戦を繰り広げた国際戦争であり、冷戦構造を世界的に定着させた地域戦争でもあった。マッカーサーは開戦から2週間後に結成された国連軍の最高司令官として指揮を執った。

北朝鮮軍（朝鮮人民軍）は6月25日午前4時、ソ連製戦車部隊を先頭に38度線を突破すると破竹の勢いで南下し、28日に首都ソウルを占拠し、韓国軍と国連軍を1か月で半島の南端、釜山周辺の南北144キロ、東西96キロの地域に追い込んだ。

マッカーサーは9月15日、劣勢を跳ね返そうと、統合参謀本部や第8軍の現地司令官の反対を押し切って仁川上陸作戦（クロマイト作戦）を敢行し、韓国に展開していた北朝鮮軍を南北に分断した。これで戦局は一変、国連軍は28日に首都ソウルを奪回し、30日、韓国軍が38度線を越え、国連軍が続いた。

マッカーサーは10月1日と9日に北朝鮮に降伏を呼びかけ、応じなければ北朝鮮全土に武力攻勢をかけると脅した。彼の威信は仁川作戦の成功で揺るぎないものになり、統合参謀本部はマッカーサーの計画や決定に口ばしを挟むことを躊躇するようになった。

トルーマンもかねがねマッカーサーの独断専行を苦々しく思っており、彼が50年7月31日、台湾を訪問し、蒋介石主席と「台湾に対する（中共からの）敵対行為にたいしては連合軍と国府軍が協力して行動する」との声明を発表した際には、「彼から国連軍最高司令官の肩書はずそうと考えた。日本占領軍司令官だけにしておけば、彼の手から朝鮮と台湾を取り上げられると思ったからだ」と回顧録に記している。しかし、辞令は出されなかった。大統領といえどもマッカーサーに対する「実力行使」ははばかられたのだろう。

多勢に無勢のウェーク島会談

トルーマンとマッカーサーは50年10月15日、ハワイと日本のほぼ中間点に位置するウェーク島で会談した。呼びかけたのは大統領で、会見地にウェ

ーク島を選択したのはマッカーサーだった。マッカーサーは37年から14年
間、米本土に帰っておらず、両者にとって初顔合わせだった。

朝鮮戦争は重大な局面に差し掛かっていた。国連軍と韓国軍がこのまま北進
を続ければ中ソが動き、局地戦争から国際戦争に拡大する恐れがあった。一方
で、戦闘を停止すれば北朝鮮に態勢を立て直す時間を与え事態を混乱させるこ
とになりかねなかった。

2人が現状をどう認識し、どんな戦略を立てるかが注目され、ワシントンか
らは35人の記者団が随行して来た。

首脳会談と、随員が加わった全体会議と、併せて1時間半。会談の詳細は公
表されず、2人は個別に発表した声明で「朝鮮問題などで意見の一致をみた。満
足の行く会談だった」と短く述べただけだった。タイム誌のロバート・シェロッ
ドは「われわれが目撃したのは政治的スタンドプレーだけだった」と、ため息
交じりに記事を書いた。

トルーマンは首脳会談が終わりかけたころ、マッカーサーにさりげなく尋ね
た。「朝鮮に中国とソ連が介入してくる可能性は？」

マッカーサーは答えた。「(中国の介入の)可能性はほとんどないでしょう。
彼らには戦闘機がない。中国兵が鴨緑江を渡河してくればわれわれ空軍の餌食
になるだけです」「ソ連は事情が少し違う。空軍機を1000機保有しており、
200か300機を送り込むことは可能だろうが、彼らには朝鮮に地上部隊を
派遣する用意がない。中国の地上軍をソ連の空軍機が援護するケースも考えら
れるが、両軍が合同演習を行わない限り成果をあげることは難しい。われわれ
は無敵である」

マッカーサーの致命的な判断ミス

マッカーサーの判断は間違っていた。中国義勇軍は空軍の支援なしで越境攻
撃を仕掛けてきた。毛沢東は北朝鮮に米軍が駐留するような事態は断固排除す
る方針で、そのための犠牲はいとわない覚悟だった。開戦当初、中国からの空
軍機派遣要請を断ったスターリンも米軍が38度線を越えた段階でミグ戦闘機
を多数送り込んで支援に回った。

朝鮮戦争は金日成国家主席がスターリン首相と毛沢東国家主席の合意を取り

付けて始めたもので、ソ連と中国は戦闘支援を約束していた。この事実をマッカーサーだけでなく米政府や情報機関も察知できていなかった。

中国義勇軍の参戦日については、中国側の資料にも10月5日、19日、24日、25日などいろいろある(朝鮮戦争、日本放送出版協会)。いずれにせよ、義勇軍20万人が戦闘に加わったことで、国連軍、韓国軍は撤退、敗走を余儀なくされた。

マッカーサーは11月28日に国連に特別声明を送り「過去4日間の戦闘で、中国軍の大部隊を含む20万以上の兵力を持つ共産軍が北朝鮮に配置されていることが明らかになった。まったく新しい戦争に入った」と述べた。4日前の楽観的見通しから一転してSOSの発進となった。彼の威信はこのころから大きく揺らぎ始めた。

トルーマンは11月30日、ホワイトハウスの定例記者会見で「米国は朝鮮の新たな危機に対処するため、どうしても必要とあれば、中国軍に対して原子爆弾を使用することを考慮中である」と言明した。

大統領が朝鮮戦争で原爆使用を検討したのはこの時だけではない。50年6月25日の戦争勃発時、7月から8月にかけて連合軍と韓国軍が釜山の一角に封じ込まれた時、そして今回である。トルーマンは12月9日の日記に「5年半、平和のために努力をしてきたが、第3次大戦が起こりそうな気がする。そうでないことを願うが、あらゆる事態に備えねばならない」としたためている。

51年4月6日、トルーマンはディーン原子力委員会委員長に「事態は原爆を必要としている」として原爆9個を戦略空軍に移すように命令し、同空軍は7日、搭載機B29をグアムに待機させていたこともあった。

ソ連の公式文書が公開されたことなどにより、朝鮮戦争に中国は500万人を動員し、ソ連は中国側の丹東などの基地からソ連人パイロットが操縦する戦闘機を6万回以上出撃させ、空中戦は1790回におよんだという(朝日新聞)。

核がらみの第3次大戦が勃発する危機は決してトルーマンの杞憂だったわけではない。

2年前に解任しておくべきだった！

50年10月15日のウェーク島会談の後、戦況は国連軍側に有利に動き出

した。51年3月15日、韓国軍第1師団がソウルを奪回、国連軍が共産軍を38度線まで押し返した。38度線が戦場となるのは4回目である。

朝鮮に派兵している国から交渉による解決を求める機運が高まった。ワシントンでは国務省、国防省、統合参謀本部は「国連軍は戦闘を停止し再開しないことを保証する協定を結ぶ用意がある」とする大統領声明を出すことで合意し、3月20日にマッカーサーに打診した。彼は24日、「敵軍の司令官と戦場で会って、国連の政治目的を理解し合おうとする交渉に臨むことは無益である。このような政治目的はさらなる出血なしには得られない」との声明を公表し、停戦案を拒否する姿勢を明確にした。

大統領は「マッカーサーに対してとる道は一つしかなくなった。もはや私は彼の反抗を許すことはできない」と、腹を決める。

4月6日、アチソン国務長官、マーシャル国防長官、ブラッドレー統合参謀本部議長、ハリマン特別補佐官とマッカーサー問題を討議した。ハリマンは彼を2年前に解任しておくべきだったと述べた。ほかの3人は即答を避けたが、7日と9日にも行われ会談で、マッカーサー解任に揃って合意した。この結果を踏まえて11日午前1時の大統領声明となるわけである。

ウェーク会談の後、片やワシントンへ、片や東京へ専用機で。別れ際に「また、近いうちに」と笑顔で握手を交わすが、2人がまみえることはなかった。

NYT が暴いた内幕

ウェーク島会談には後日談がある。トルーマンに解任されたマッカーサーが51年4月19日、上下院合同会議でジェスチュアを交えながら自信に満ちた表情で演説するテレビをワシントン支局で見つめていたニューヨーク・タイムス記者、アントニー・レビエロには心に閃くものがあった。「あのウェーク島会談がこの解任劇のお膳立てだったのではないか」。レビエロ自身大統領に随行して現地に行っていた。

彼は早速、ホワイトハウスと国務省の関係者3人に探りを入れた。翌20日、1人から電話かかってきた。公式記録を見せてくれるという。彼は分厚い資料を2時間かけて筆記してまとめた記事は「明るみに出たウェーク島会談」という見出しで22日のニューヨーク・タイムス（NYT）の一面を飾った。見事

なスクープで、彼はピューリッツァー賞を受けた。ウェーク島の首脳会談の内容やマッカーサーの中国介入に関する発言などの多くはNYTによって明らかにされたものである。

レビエロは情報源を口にしなかったが、それと思しき人物が浮かび上がった。ウェーク島会談に随員として参加した無任所大使、フィリップ・ジェサップの秘書、バーニス・アンダーソンで、会議場の隣の部屋でトルーマンとマッカーサーのやり取りを一部始終記録していた。このことは51年5月3日から5日まで開かれた軍事・外交合同委員会の質疑応答の中で明らかになった。

フレイジャー・ハントは著書で「アンダーソンは首脳会議の会話や注釈などを半年後、ワシントンの親しい記者に流していた」と書いている。レビエロの情報源はアンダーソン女史だった。

(徳間書房「マッカーサーと日本占領」の原稿に一部加筆したものです)